
この箇所は大きく三つに分けることができる。

① 20 v・34—35 v

イエスと 12 使徒たち、またイエスを慕い求めてきた人々。

② 21 v・31—33 v

イエスの身内の者たちとイエスを連れ戻そうとしている人々。

③ 22—30v

エルサレムから下ってきた律法学者たち。

① イエスと 12 使徒たち、またイエスを慕い求めてきた人々。

20 v 「・・・」

イエスは先の出来事で夜通しの祈りをされ、12使徒たちを選ばれた。それは、彼らを身近に置き、何よりの目的である「神の国の到来」である「福音」を宣べ伝えさせるためであった。選ばれたばかりの12使徒たちは、価値観も真逆の者達がおおく、そのため人間的に見れば、彼らが一致団結して一つの(福音宣教)事を成し遂げて行くのは、不可能だっただろうと容易に想像つく。しかし、彼らがイエスに対する思い(献身)、とその信仰によって繋がるなら、彼らは一つになることができるのである。何よりイエスが彼らを一致させてくださるのであるが。

使徒をはじめ、人間、そして教会は、イエスを見上げた時にのみ、それぞれが全く違う個性であっても「一致できる共同体」となることができるのである。

さて、この時、選ばれた12使徒たちは「神の国」を宣べ伝えるという大役があたえられ、さぞ嬉しかっただろうと思う。しかしその喜びも束の間、さっそく彼らは食事をとる暇もないほど忙しく働くことになった。主の弟子としての早速の「試み」と言える。

人間にとって「食べる・肉の糧の問題」とは実に深刻なことである。

なぜなら人間にとって「食べる」ことは、地上の喜びの中でも非常に重要な部分となっているからである。また、どんなに忙しくとも食事をしなければモチベーションも下がり、集中して良き働きや奉仕を継続してできなくなる。そして次第に周りへの不満となっていく。

この「食べる・肉の糧の問題」が使徒たちを襲った。

またこの時「大勢の人が集まって来たので…」20 v とある。

彼らの殆どの人々は、「イエスに仕えたい！」ということではなく、自分たちの「病が癒されたい！」という動機で集まってきている者達である。自分たちの用事が済めば簡単にイエスから離れていく人々でもある。しかし、そうした者達であっても「イエスに会いたい」という純粋な思いはあった。彼らはイエスの居られた一軒の家に押しかけて来たのである。

この時イエスはガリラヤ地方に居た。この家とは、おそらくペテロの家だっただろう。とすれば、ペテロとアンデレは、自分たちの家に明らかな定員オーバーとなる大勢の人々が押し

かけてきたことに内心穏やかではなかったかもしれない。また普段の生活を送っていたペテロの妻と姑にとっては、驚く出来事でもある。家の内外の物も、もしかすると何か壊れている可能性もある。また綺麗にしていた部屋はぐちゃぐちゃにされ、人によっては屋根を剥がしてまでもイエスに会いに来ようとする者さえ過去には居たのだから、大変である。

ペテロとアンデレは、自分たちの持ち物さえも主のために捧げ、また手放さなければならないということをここでさらに学んだと言える。もちろん他の使徒たちもこのことを共に体験し、「主に仕える」とはどういうことなのかを改めて学んだであろう。

この時の使徒たちは、食事のこと、住居のこと、その他様々な、いわゆる物質的なことの試みがあったと言える。

それでも、使徒たちは、「イエスと共に居たい。」と思っていたのである。そして群衆もまたイエスと共に居たかったのである。それが、後半最後の34-35 vと繋がっている彼らに共通した部分であった。

②イエスの身内の者たちとイエスを連れ戻そうとしている人々

21 v 「・・・」

イエスの身内の周りには、使徒や群衆と違った立場の人々が居た。その中には、イエスのことを「気が狂ったのだ」と言っている者も居たのである。そこで身内の者はイエスを連れ戻そうと出てきた。

この二者の共通点は、「まさか！あの『イエス』がきたるべきメシヤ・救い主キリストであるはずがない！！」といったところであろう。

彼らにとってイエスが宣べ伝えている「神の国」とは、お笑い話であり、また非現実的なことであり、いわゆる『夢見るイエスの空想話』としてしか受け止められていないと言える。それが「気が狂ったのだ」ということであり、また身内の者も「連れ戻そう」としたわけである。

身内の者達は、人々のこうした「うわさ」を気にした。またその周りの者たちもイエスを非現実的な者として社会的秩序を求めた。

もしかすると彼らが考える「きたるべきメシヤ」とは、後光を射して天上から降りてくるような者なら信頼したのかもしれない。

彼らは、このイエスこそが本当に！本当の！「きたるべきメシヤ・救い主キリスト」である！ということが分からなかった。人の目を気にし、また彼らの思う社会的な枠の中だけで物事を考えていたのである。31節からのイエスの言葉、「神の御心を行う人は誰でも兄弟であり母である」は、これらに対する言葉となっている。すなわち、イエスご自身が宣べ伝えている「神の国」は「まこと」であり、またご自分こそがまことの「救い主」であるということ。これを彼らに明確に示すための言葉となったのである。彼らの要求を完全に拒否したのである。これらは一見、イエスは身内を大切にしない者と思えなくもない言葉だが、しかし、イエスが身内の者を大切にしていないということでは決してない。なぜなら旧約聖書にも精通していたイエスは、「父と母を敬え」というモーセの十戒をもきちんと守っておられたお方であるからだ。それゆえイエスが身内を大切にしていたというのは、もはや言うまでもないこと

であろう。イエスはこの時の一連の出来事を通して、その深い真意である「神の国」こそが、この世の一時的な家族のつながりということや、また不安定な安全や安心また平和といこと、さらにはすぐに無くなるような祝福とは異なる、永遠の祝福と恵み、そして決してなくなることはない完全な愛の関係、また完璧で絶対の安心と安全と平和が、この「神の国」にはあるのだ！ということ、そしてそのために必要なのが「神の御心を行う」という信仰によって結び合わされていくことが最も重要である。ということ、イエスは、むしろ彼らに示したのである。それは裁きではなく救いの言葉であった。

イエスの身内の者やその周りの者達は、人のうわさ、また彼らが考える社会的な秩序とその枠組みを気にするという「試み」に遭い、「神の国」と「救い」の真実が見えなかったのである。

人が、神の御心を行おうとするとき、そこにはいつもこうした「うわさ」や「社会の枠組み」というものが課題として出てくる。「世間体を気にする」とも言える。しかし、いつの時代も、神の御心を行おうとする信仰者は、それらの「試み」よりも、神の御心を見つめて一心に離れないのである。

ノアは、洪水が来ると人々に伝え、馬鹿にされても箱舟を作った。イザヤは裸で人々の前に出たこともあった。エリヤもエリシャも時の常識と違うことをたった一人でも証した。そして私たちもまた、まわりの人々を見るのではなく、真の神を見つめ、洗礼を受けたのである。神の御心を求め、行い、そして人のうわさと世間体に勝利したのである。

③エルサレムから下ってきた律法学者たち

22-30v 「・・・」

イエスの行動と彼に関わる出来事に対して一番敏感だったのが、ユダヤの宗教家たちであった。中でもパリサイ人や律法学者はその中心的な存在であったが、この時、彼らはわざわざエルサレムから下って来たのである。ガリラヤまではおよそ3日の道のりである。

人を監視しようと3日間の移動距離をも気にしないと相応な根性であるが、彼らの原動力はイエスへの怒りや裁く思いであった。

一方、怒りや裁く思いとは別に、パリサイ人や律法学者たちがユダヤの人々に対して、「行動を監視する」ようなことは、特別なことではなかった。むしろ人々は、自分の行為がユダヤ教の原則から離れ、間違った行動を起こしていたとなれば、死罪に値することになったため、ユダヤの宗教家たちとの交わりは日常的でもあったのである。

イスラエルの人々は「神」に対して熱心で、宗教というものを恥ずかしいとは全く思っていない。日本人には考えられないことだろう。

さて、彼らはエルサレムから下って来た。エルサレムとは神殿のある場所である。つまりユダヤ教の総本山・本部と言える。本部から派遣された律法学者たちが、イエスの行動を監視し、必要ならばすぐにでも死刑に処する準備をしているのである。

彼らは、このイエスについて「…悪霊どものかしらによって、悪霊を追い出しているのだ…」と語った。

これに対してイエスは23-29vの内容で答えられた。

イエスが答えられた内容こうである。「第一に国家や、家、またたとえ悪魔や悪霊であったとしても、内輪争いや仲間揉めをして自分の国を分裂させるような愚かなことはしない」ということである。

それは教会でも同じである。もし教会内で内輪争いや仲間揉めがあるならば、教会は立ち行かない。そこに待っているのは分裂と滅びである。私たちはこのことを明確にしておかなければならない。ちょうど12使徒たちがそれぞれが違った個性の持ち主であったにも関わらずまとまれたのは、「キリストを一心に見つめたから」である。自分の考えで事を進めたのではない。キリストの「御心」を皆が待ち望んだのである。そしてそのために会堂に集まり、家に集まり、日々熱心に祈り求めたのである。神はまさにそこに「御心」を示してくださったのである。教会はそうして成長してきたのである。

もし内輪争い、仲間揉めがあれば、そこには分裂と滅びが待っているということをあのサタンと悪霊さえも知っていたというのは驚きである。

さて、イエスはさらに御自身のことを悪霊呼ばわりした律法学者たちに、「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」28-29vと言われた。

28vの「神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。」と、29vの「聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」との違いは、なんだろうか。

民数記(Num)15:27-31にはこのように記されている。「もし個人があやまって罪を犯したなら、一歳の雌やぎ一頭を罪のためのいけにえとしてささげなければならない。祭司は、あやまって罪を犯した者のために、主の前で贖いをしなければならぬ。彼はあやまって罪を犯したのであるから、彼の贖いをすれば、その者は赦される。

イスラエル人のうちの、この国に生まれた者にも、あなたがたのうちにいる在留異国人にも、あやまって罪を犯す者には、あなたがたと同一のおしえがなければならない。

国に生まれた者でも、在留異国人でも、故意に罪を犯す者は、主を冒瀆する者であって、その者は民の間から断たれなければならない。

主のことばを侮り、その命令を破ったなら、必ず断ち切れ、その咎を負う。」この聖書の原則がイエスの言われたことに当てはまる。すなわち、信仰なく、あるいは本当には分かっていない神のことを、神に対して発言する者と、既に明確に神のことばを聞いていながらその神と神のことばを否定する者という違いである。

イエスはすべての人々が本当の意味では神のことを知らないことをご存知である。そうした意味ではすべての者が前者なのである。ゆえに人が言った汚しごとは、後に本当に神を知った時に、心からの悔い改めをすることを通して、神の前に清算し赦していただけるのである。しかし、聖霊を汚す者とは、今、まさに目の前でなされている神の御業を否定する者のことである。神の御業を、神の御ことばを、神の存在を今、目の前で語られ、見せられ、体験し、聴いているのに、それを否定する者は、どのようにして神からの救いを得ることができるだろうか。また神はどのようにしてこれ以上の救いを与え、用意することができるだろうか。

その者は、聖霊による明らかな神からの語りかけを自らが拒否したのである。そういう者には、救いは与えられず、永遠に赦されず、罪に定められてしまうのである。

今日、今、この礼拝の中で語られている神のことばとその救いを他の誰かに語っているかのように思わないで欲しい。まさに「私」に語られていると心を開け、聖霊の働きを受け入れ、決して汚す者とならないようにさせていただきたい！

律法学者たちはこのことが分からなかったのである。

私たちの周りには、食事のこと、家のこと、物質的な試み、また人のうわさ、世間体、またそうした人々と社会に対する恐れもある。また律法学者のように宗教に熱心でも間違った宗教間と霊的な盲目となるサタンからの攻撃も日夜襲ってくる。

そのすべてから救われ解放されるには、神の御子であるイエス・キリストを一心に見つめて離れないことである。

何故なら、このキリスト以外に、私たちには救われるべき御名はないからである。イエスは、これらのことをただ口先だけで語ったのではなく、御自身の命をも投げ出し、十字架にかかるほどに私たちを愛してくださったのである。まさにこのことのために命をささげた真剣さがある。私たちは「気が狂っているのか神の御心を行うのか」どちらだろうか。神の愛と真理のイエスから目を離さないで、今週も歩ませていただきたい。アーメン。